

## 入声 P 音・音便に見る音変化

ロンドン大学 黒沢 晶子

### 1 はじめに

「学校」「実行」「出席」「絶対」「発表」「十階」の下線の字のように、あとに続く子音によって促音化する一連の漢字は、もともと中国語で k, t, p で終わる入声音だった。この促音化の規則性については、黒沢 (1994, 1995) で検討したが、本稿では、その中で促音化する字が限られている入声 p 音の音変化が和語のウ音便、促音便に見られる音変化と同じタイプのものであったことを示したい。そして、その二者の音変化が重音節化という概念で统一的に説明できるものの、開音節化への力も同時に働いていたと考えられることを述べる。

### 2 入声音の漢字 365 字 (常用漢字中)

初めに常用漢字中に含まれる入声音を一覧する。

#### 2.1 入声 k 音 (219 字)

～キ：域、駅、易、益、液、疫、喫★、劇、激、撃、式、識、夕、石、赤、昔、席、積、責、績、斥、析、隻、惜、跡、瀉、籍、笛、的、適、敵、摘、滴、壁、癖、力、歴、曆

～ク：悪、握、育、屋、億、憶、画、角、各、覚、格、確、括、革、閤、核☆、殻、郭、較、隔、獲、嚇、穫、学、楽、額、岳、菊、客、却、脚、逆、虐、曲、局、極、玉、谷、国、黒、告、刻、穀、克、酷、獄、作、昨、策、冊★、削、索、酢、榨、錯、軸、借、尺、勺、酌、积、爵、弱、若、寂、宿、祝、縮、叔、淑、肃、熟、塾、色、食、植、織、職、殖、触、飾、囑、辱、足、息、速、束、側、則、測、即、促、族、続、属、俗、賊、度▲、宅、扱、沢、卓、拓、託、濯、諾、濁、竹、築、畜、逐、蓄、着、嫡、直、勅、特、得、徳、匿、督、篤、読、毒、独、肉、白、博、伯、拍、泊、迫、舶、薄、麦、漠、縛、爆、百、服、福、副、復、複、腹、伏、幅、覆、北、牧、朴、僕、墨、撲、幕、膜、脈、木、目、黙、役、薬、約、訳、厄、躍、浴、欲、翌、仰、翼、落、絡、酪、陸、略、録、六、録、惑、粹

#### 2.2 入声 t 音 (100 字)

～チ：一、菴、吉、七、日、八、鉢

～ツ：逸、悦、越、謁、閱、乙、活、割、括、喝、渴、滑、褐、轄、詰▽、屈、堀、掘、血、決、欠、結、潔、穴、傑、月、骨、札、刷、殺、察、撮、擦、室、失、質、疾、漆、実、出、述、術、切、雪、折、節、説、設、拙、窃、舌、絶、卒、率、達、脱、奪、秩、室、鉄、迭、哲、徹、撤、凸、突、熱、発、髪、伐、抜、罰、閤、筆、必、匹◇、泌、(不▲)、私、沸、物、仏▽、別、没、末、抹、密、滅、律、列、劣、烈、裂

#### 2.3 入声 p 音 (46 字)

##### 2.3.1 「～ツ／～ッ」がある字 (14 字)

圧★☆、甲、合、執★、湿★、拾、十、接★、摂★、雑★、入、納、法、立★

##### 2.3.3 「～ウ」のみの字 (32 字)

四、押<sup>しゅう</sup>、急、級、泣、給、吸、及、協、峽、狭、挟、脅、業、岬<sup>こう</sup>、習、集、襲、  
汁、洪、扱、涉、疊、挿、答、塔、搭、踏、乏<sup>しゅう</sup>、葉、粒、獵

★☆☆▲▽印の字：注1参照

もともと中国語の四声のひとつで k, t, p で終わる短くつまった調子の漢字音を入声という。日本語では開音節化して、k 音は～キ、～ク、t 音は～チ、～ツ、p 音は～フ（現代仮名遣いで～ウ）で終わる形をとるようになった。このうち入声 p 音の字には、～フ（～ウ）以外に慣用音として～ッ／～ツを持つようになった字（十、合、雑、立など）がある。～フ（-Φu）で受け入れた入声 p 音の字に k, s, t, h(p) の無声子音が後続することによって促音化を起こして～ッと表記される（例：雑貨、雑誌、雑多、雑費）。無声子音が後続する熟語が多く、またその熟語が使用頻度の高いものであった場合、～ッとそれが開音節化した～ツが慣用音として定着した。2. 3. 1の字はそうした字だが、この中には、「十」「雑」「法」のように～ウ、～ツ／～ッの両方の字音をもつものと、「圧」「接」のようにほとんど～ツ／～ッの字音しか使われないものがある。～ツがその字の基本的な字音として認識されるようになると、字によっては、無声子音以外のものが後続する場合にも「雑談」「立案」「接合」のように、～ツが使われるようになった。また、それ以外の多くの入声 p 音の字（2. 3. 2）は、現代語では～ウの字音しか持たず、促音化は起こさない。（注2）

### 3 入声 p 音の音変化

#### 3. 1 16世紀の入声 p 音

しかし、入声 p 音の中には、現代語では長音「～ウ」の音しかないが、かつて促音化した「～ッ」の音を持っていたものがある。沼本（1986）、小松（1956）に11～14世紀の資料から次のような例が報告されている。

急迫（きつつい）、及見（ぎつけん）、及諸（ぎつしよ）、習気（しつけ）—沼本  
論語集解（しっかい）、答（たつ）対、葉公（せつこう）—小松

本稿では、現代語と違う入声 p 音の例にどのようなものがあつたかを知るために、音声資料の中で、多くの漢語が集められ、当時の漢字音がよく分かる資料として落葉集<sup>らくよう</sup>（1598刊）及び日葡辞書<sup>にっぽ</sup>（1603刊）（資料参照）を選び、入声 p 音の字が語頭に來る語を調べてみた。すると、現代語にない促音化した音を持つもの（例：急速<sup>きつそく</sup>）、また両方の字音を持つものでも、促音化が現在よりはるかに活発に行われていた字（例：法）のあることがわかる。一方では、現在「～ツ」の方が一般的である字（例：雑）に、長音化した「～ウ」がよく使われていた例も見られる。

（ ）内の読み方は、落葉集の歴史的仮名遣い、日葡辞書のポルトガル語式ローマ字を現代仮名遣いに直したものの。（例：急速 きつそく, Qissocu→きつそく 業障 ごつしやう, Goxxō→ごつしょう）

N: 日葡辞書の語例、R: 落葉集の語例

急速（きつそく）NR、急度（きつと）NR；業苦（ごつく）N、業障（ごつしょう）NR、業報（ごつぼう）NR、業戯（ごつけ）R；答拜（たつぱい）NR

これらの字は、母音、有声子音、そして同じ無声子音の前で長音化した音も併せ持つ。(急=きゅう、業=ごう)

急雨 N、急急 NR、急刻 R、急緩 R、急管 R、急雪 R、急難 N、急病 NR、急便 NR、急用 NR；業(ぎょう、ごう) N、業因(ごういん) NR、業縁(ごうえん) R、業作(ごうさ) NR、業術(ごうじゆつ) R、業人(ごうにん) NR、業病(ごうびょう) N、業惑(ごうわく) NR；答酬(とうじゅう) NR、答所(とうじょ) R

また、現代語にもある語彙で、長音、促音が現代語と逆になっている例：

雑居(ぞうきよ) N (cf. 「ざっきよ」「ざっこ」もある)、雑談(ぞうたん) N、雑務(ぞうむ) N；入室(にっしつ◆) NR、入国(にっこく) R；法式(はっしき、はっしえき) NR、法相(はっそう、ほっそう) NR、法則(ほっそく) NR、立派(りゅうは) N

「雑(ぞう)」は現代語に比べて、かなり造語性が高かった。(生産的だった) (N)

雑行(ぞうぎょう)、雑巾(ぞうきん)、雑具(ぞうぐ)、雑漿(ぞうず)、雑説(ぞうしえつ◆)、雑駄(ぞうだ)、雑煮(ぞうに)、雑人(ぞうにん)、雑熟(ぞうねつ)、雑兵(ぞうひょう)、雑木(ぞうぼく、ぞうもく)、雑物(ぞうもつ◆)、雑話(ぞうわ)

cf. 雑紙(ざっし)、雑色(ざっしき)、雑舎(ざっしゃ)、雑書(ざっしょ)、雑掌(ざっしょう)、雑餉(ざっしょう)、雑筆(ざっぴつ◆) ◆印：注3

「法」は、「はう」「ほう」の方が多いが、「はっ」「ほっ」もかなりの数があり、生産的だったことが分かる。

	落葉集	日葡辞書
はう/ほう	37	32
はっ/ほっ	14	17

数字は語数。語例は次の表を参照。

	落葉集	日葡辞書	語 例
はう	?	5	法、法皇、法儀、法理、法例
ほう	?	27	法、法位、法威、法衣、法会、法界、法坐、法師、法事、法灯、法服、法慢、法名、法務、法樂、法力、法論
はっ	5	6	法眷、法式、法相、法度、法被
ほっ	9	11	法華、法性、法身、法戦場、法相、法則、法体、法報応

日葡辞書では、「法」は以下の綴りで表されている。

はう Fō- はっ (入声) Fat-、(促音) Facc-, Facq-, Fapp-, Fass-, Fatt-, Faxx-  
 ほう Fō- ほっ (入声) Fot-、(促音) Focc-, Focq-, Fopp-, Foss-, Fott-, Foxx-

「はっ」「ほっ」は、促音化したものが大多数だが、中に入声 -t で表記されている例がある。

法眷 Fatqen, 法水 Fotsui

本来入声 -p だったものが、促音化の過程を経て、入声 -t と混同された（小松 1956, 森田 1993）例と言える。

### 3. 2 音変化と字例

-Φu>-Φ <sup>o</sup> u>(-Φ)>-q	庄、甲、合、執、湿、拾、十、接、撰、雑、入、納、法、立
	雑（ザフ）、納（ナフ、タフ）、法（ハフ、ホフ）
-oΦu>-ou>ô>ō	業（ゴフ）、法（ホフ）、乏（ボフ）
-iΦu>-iu>yū	急、級、泣、給、吸、及（キフ）、執、襲（シフ）、習、集、汁、渋（シフ、ジフ）、十（ジフ）、立、粒（リフ）
-eΦu>-eu>yō	協、峽、狭、挟（ケフ）、業（ゲフ）、接、渉、撰（セフ）、畳（デフ）、葉（エフ、セフ）、獵（レフ）
-aΦu>-au>ō>ō	庄、凹、押（アフ）、合（ガフ、カフ）、岬、峽、狭（カフ）、扱、挿（サフ）、雑（ザフ）、答（タフ）、納（ナフ、タフ）、法（ハフ）

ū 無声化    -q 促音    ô 合音    ō 開音    ō 長音

### 4 促音便とウ音便

古語でハ行四段に活用した動詞で現代語でアワ行五段動詞になったものの音便形は、関東系方言（共通語を含む）で促音便、関西系方言でウ音便をとる。（注4）（注5） この音変化は、入声 p 音に起こったものと同じ形をとっている。

音 変 化	和 語 音 便 形	漢 語 入 声 p 音
-Φu>-Φ <sup>o</sup> u>(-Φ)>-q	会って、言 <sup>う</sup> って、思 <sup>う</sup> って、買 <sup>う</sup> って、吸 <sup>う</sup> って、使 <sup>う</sup> って、習 <sup>う</sup> って	合、執、十、雑、納、法、立
-oΦu>-ou>-ô>-ō	争 <sup>う</sup> うて、追 <sup>う</sup> うて、思 <sup>う</sup> うて、通 <sup>う</sup> うて、誘 <sup>う</sup> うて	法
-iΦu>-iu>-yū	言 <sup>う</sup> うて	急、執、習、十、立
-eΦu>-eu>yō	—	協、業、接
-aΦu>-au>ō>ō	会 <sup>あ</sup> うて、失 <sup>う</sup> うて、買 <sup>こ</sup> うて、叶 <sup>か</sup> うて、仕舞 <sup>し</sup> うて、違 <sup>ち</sup> うて、習 <sup>な</sup> うて、貰 <sup>も</sup> うて、賑 <sup>にぎ</sup> お <sup>お</sup> うて	雑、答、合、納、法
-uΦu>-uu>ū	食 <sup>く</sup> うて、狂 <sup>くる</sup> うて、吸 <sup>く</sup> うて、救 <sup>く</sup> うて、振 <sup>ふる</sup> うて、結 <sup>く</sup> うて	—

### 5 重音節化と開音節化

4 で見たように、入声 p 音に起こった促音化・長音化と、和語のハ行五段動詞に生じた促

音便・ウ音便（長音）は、同じタイプの音変化である。

合	gaΦu>	gaΦu <sup>o</sup> >	(gaΦ)>	gaq	合唱、合致、合併
疑ひて	utagaΦite>	utagaΦite>	(utagaΦte)>	utagatte	疑って、疑った

合	gaΦu>		gau>	gō>	gō	合格、合成、合法	
疑ひて	utagaΦite>	utagaΦite <sup>o</sup> >	utagaΦte>	utagaute>	utagōte>	tagōte	疑うて、疑うた

促音化・促音便は、次のように起こる。

高母音 (i, u) が脱落 → 子音同化 (子音：無声子音) → (C)VC (C-Q) Q-促音  
長音化は、次のように生じる。

子音 (Φ) が脱落 → 二重母音 → 長母音 → (C)VV (V-R) R-長母音  
ウ音便化は、次のように生じる。

高母音 (i) が脱落 → 子音 (Φ) が脱落 → 二重母音 → 長母音  
→ (C)VV (V-R) R-長母音

一つのものの音変化に二通り以上の可能性があり、それが二通り実現し、併存している。

結果として生じる音節の構造は、(C)VC、(C)VV と異なる形をとるが、共通しているのは、どちらも2モーラの音節、重音節（窪菌 1994、窪菌 1995、堀 1995）だということである。どちらも1モーラの軽音節+1モーラの軽音節から変化している。

軽音節 (1モーラ音節) (C)V は (歯、葉)、き (木、黄、気)、え (江、絵)

重音節 (2モーラ音節) (C)VC てん (点、天)、きつ [て] (切手)

(C)VV りょう (量、獺)、まい (枚、舞)

窪菌 1994、窪菌 1995 では、日本語は、上代において(C)Vの1モーラ音節(軽音節)を基本構造としていたし、現代語でも軽音節が重音節よりはるかに頻度が高いけれども、歴史的な観点から日本語に起こった音変化を見ると、軽音節から重音節を作り出す性格のものが非常に多いことが指摘されている。現代語でも軽音節から重音節への移行が生産的な音声過程として進行しているという。

入声p音とハ行五段動詞に生じた音変化を、重音節化という概念でひとまとめにすれば、統一的な解釈が可能である。ただ、学校、別荘、合唱に見られる促音が無声子音の前に限られ、語末に来るような独立性に欠けること(注3)、基本的な字音が母音添加による gaku, betcu, gō 等であり、ku, tcu, gō が共に開音節であることを考えると、重音節化と開音節化への力が日本語では共に働いていた、と言えるのではないだろうか。

音変化に重音節化と開音節化への力が共に働くとすれば、あるいは重音節なり開音節が無標(基本的かつ自然で使用頻度が高い)とするなら、軽音節でなく開音節でもない二重母音や長音が両方の条件を満たして一番安定がよいはずだが、実際には、「適当」は「書いて」が「書いて」になったように「テートー」にはなっていないし、ウ音便「買うた」は関東系方言では使われていない。

音節構造に普遍的な制約群があり、その制約群に言語によって階層があり、優先順位のつけかたによって個別言語での表れが異なる、とする最適性理論 (Optimality Theory) は、この問題にある見通しをつけるかもしれないが、それは今後の課題としたい。

\*\*\*\*\*

注1 ★印 (喫、冊、圧、執、湿、接、撰、雑、立) : 慣用音「〜ツ」音が一般的で、入声 t 音のように見えるもの。入声 t 音と同様、無声子音の前で促音化するため、日本語教育上は入声 t 音と同じ扱いでかまわない。ただし、入声音がそれぞれの母語に残る広東語、韓国語話者には、注意を要する。

入声 k 音の「喫」「冊」の漢字音で、私たちがまず思いつくのはキツ、サツというツで終わる音だが、本来は k で終わる音だった。「喫」にはキヤク、ケキ、「冊」にはサクという字音もある。「冊」には「短冊」という語があり、それが入声 k 音だということがわかるが、「喫」のキヤク、ケキは使われないため、むしろ入声 t 音のように見える。しかし、実際に使われる語彙で促音化するのが「喫茶店」「冊子」のように限られたものであるため、日本語教育上の観点からは大きな問題にはならない。

入声 p 音の「圧」「湿」「接」「撰」には、それぞれオウ、シュウ、ショウ、ショウというウで終わる音があるが、その音を使う熟語がほとんどないため、普通はアツ、シツ、セツ、セツが基本的な音と認識されているだろう。

☆核、☆圧、☆押、☆乏 : 広東語では、-t で終わる。

◇匹 : 「匹敵」「匹夫」などに現れるヒツが本来の音。「二匹」のヒキは慣用音。

▲度 : 「支度」「付度」などに現れるタクが入声 k 音。「温度」「度量」などのドは去声。

▲不 : 日本語では、入声フツではなく、上、平声から来たフとその慣用音ブが使われている。一方、広東語では bet. fau、韓国語では pul.pu と、両方の音が使われている。(広東語で -t、韓国語で -l で終わるのは、入声 t 音。)

▽詰、▽仏 : 広東語では、-k で終わる。

注2 現代仮名遣いで〜ウで表記される字には、入声 p 音ばかりではなく、「小」「休」「行」など上声、平声、去声から来たものも多い。これらと入声 p 音である「急」「業」「集」などは、現代日本語の表記、発音からは見分けがつかない。しかし、広東語、韓国語のように現在も入声 p 音の字に -p の音を残している言語では、それ以外の字との区別が容易にできる。(黒沢 1994)

注3 入室(にっしっ)、雑熱(ぞうねっ)、雑筆(ざっぴっ)のように「っ」で終わっているのは、日葡辞書で -t で終わっている語。入声 t 音は、かなり長い間、無声子音の前のみならず、語尾でも有声子音の前でもそのまま発音されていた(沼本 1986)が、「規範的には入声形を正しいとしながらも、話し言葉では開音節化の傾向が次第に進んでいたものらしい」(森田 1989 p.854)

注4 アワ行五段動詞は大多数が促音便をとるが、その中に促音便をとらないものとして、次のような例がある。 恋う(上二段)、請う、そぐう、<sup>たま</sup>賜う、<sup>たも</sup>賜う、問う

注5 二通り以上の音便形、または音便形と非音便形が併存しているものには、促音便・ウ音便以外に、次のようなものがある。音便形はすべて重音節である。

赤いー赤くて、	おいしいーおいしくて	非音便	赤うて、おいしゅうて	ウ音便
飲むー飲んで	飛ぶー飛んで	撥音便	飲うで、飛うで	ウ音便
香ぐはしーかんばしい		撥音便	こうばしい	ウ音便

商人 (あきびと) ーあきんど	撥音便	あきゅうど	ウ音便	
出すー出して	離してー離して	非音便	出いて 離いて	イ音便
借りるー借りて	非音便 (上一段活用)	借って	促音便 (五段活用)	

#### 参考文献

- 小倉進平 1920 「國語及朝鮮語のため」 (七 國語字音と朝鮮語字音との比較 95-102)
- 黒沢晶子 1994 「漢字音における母音の脱落現象と教え方」  
(第7回日本語教育連絡会議報告発表論文集 84-92)
- 黒沢晶子 1995 「『別室』と『特別室』に見る音変化の規則性」  
(第8回日本語教育連絡会議報告発表論文集 56-64)
- 窪菌晴夫 1994 「日本語の音節量について」 (国語学 178 集 7-17)
- 窪菌晴夫 1995 「語形成と音韻構造」第4章 くろしお出版
- 窪菌晴夫 1996 「派生か制約かー最適性理論入門(上、中、下)」 (月刊言語 vol.25 No.4. 5. 6)
- 国語学研究事典 1977 明治書院
- 小松英雄 1956 「日本字音における唇内入声韻尾の促音化と舌内入声音への合流過程」  
(国語学 第25輯 67-79.)
- 橋本進吉 1932 「国語音韻史」 (昭和7年度講義集 第8章 244-264) 岩波書店
- 橋本進吉 19 「文禄元年 天草版吉利支丹教義の研究」 (文禄元年 天草版吉利支丹教義  
用語について ー文字と発音について 1-73 東洋文庫論叢 第9)
- 橋本進吉 1938 「国語音韻の変遷」 (岩波文庫「古代国語の音韻に就いて」123-180)
- 原口庄輔 1994 「音韻論」開拓社
- 堀誉子美 1995 「音節構造と聴覚印象ー日本語とフィンランド語の対照研究ー」  
(第8回日本語教育連絡会議報告発表論文集 146-150)
- 森田武 1989 「邦訳『日葡辞書』索引」岩波書店
- 森田武 1993 「日葡辞書提要」清文堂
- 森田富美子 1983 「広東語と日本語における漢字音の比較対照表」  
(国際学友会 日本語学校紀要7 及び 国語学論説資料 第20号 第5分冊 43-55)
- 沼本克明 1986 「日本漢字音の歴史」東京堂出版

#### 資料

- 中文字典 1965 「廣州音系表」 香港華僑語文出版社
- 朝鮮語辞典 1993 「漢字音訓索引」 小学館
- 東亜 PEURAIM 日韓辞典 1990 「字音索引」 韓国 東亜出版社
- 日本語尾音索引ー現代語編ー1978 笠間書店
- 邦訳日葡辞書 1980 土井忠生、森田武、長南実編訳 岩波書店
- 邦訳日葡辞書辞書索引 1989 森田武編 岩波書店
- 落葉集 (天理図書館 善本叢書 和書之部 第76巻 落葉集二種) 天理大学出版部八木書店 1986